

タイトル	献辞(竹田憲司教授退職記念号)
著者	高木, 裕之
引用	北海学園大学経営論集, 6(4)
発行日	2009-03-25

献 辞

経営学会長 高 木 裕 之
経営学部長

本学経営学部竹田憲司教授には、平成 21 年 3 月 31 日をもって退職されることになりました。先生のご退職にあたりまして、経営学部教授会ならびに同経営学会は、これまでに先生より賜りましたご指導とご厚誼に深甚の誠意を表するために、退職記念論文集の刊行を企画いたしました。ここに謹んで本書を先生に献呈いたします。

竹田先生が乞われて北海学園大学に教養部講師として赴任されたのは、1973 年（昭和 48 年）のことでした。ご赴任当時の北海学園大学は 1991 年大学設置基準の改正（大綱化）以前の教育課程でありましたので、経済学部、法学部及び工学部の 3 学部のほか、大学全体の一般教育課程を統括する教養部から構成されていました。この大綱化によりほぼすべての大学において大幅な組織転換が行われ、本学も 1997 年度をもって教養部を廃止しました。そもそも、この大綱化は、一般教育と専門教育の区分、一般教育における一般（人文、社会、自然）、外国語、保健体育の科目区分を廃止し、学部教育のもとに自由なカリキュラム編成を行う一方で、教育研究活動については大学自らが点検・評価を行うことを目的としたものでありました。

竹田先生は、この戦後未曾有の教育課程改革にあって、本学にご赴任以来、体育の中心的存在として全学部の学生にスポーツの楽しさ・意義、健康管理の大切さを教授されながら、社会人としての教養と豊かな人間性を兼ね備えた学生を育ててこられました。

その大綱化からすでに 20 年近くが経ち、多くの大学では一般教育と専門教育とが一体となった学部教育を達成するためのカリキュラム改革が行われてきましたが、大綱化の理想と現実とのギャップ、そしてまた、大学を取り巻く環境の急速な変化から、中央教育審議会は、昨年末「学士課程教育の構築に向けて」を答申しました。ここでは、「何を教えるか」よりも「何ができるようになるか」に力点が置かれ、リベラルアーツとしての一般教育の重要性が改めて盛り込まれたのでした。これまでの大学教育に関する一連の改革は、ややもすると見失われがちであった一般教育の重要性を学士課程教育においてしっかりと位置づけるものです。

教養部教授として教養部廃止を見届けられた竹田先生は、経済学部教授として学部にも所属された後、平成 15 年に経済学部の改組転換により新設された経営学部教授として就任されました。当時、経営学部は、マネジメントを組織的・体系的に教育研究する北海道初の一貫した研究機関として社会的に期待され、その期待に応えるべく学部の設置準備段階からいろいろな可能性を不断に模索し、実行してきました。「走りながら考える」若手教員の多かった新設の経営学部には竹田先生は非常に心強い存在であり、経営学部の礎を築いていただいたばかりでなく、学部教育の将来への道標を与えてこられました。

竹田先生は、陸上競技における北海道の冬季間のトレーニングに関する研究、大学生及び高齢者のフィットネスに関する研究を中心に、研究とスポーツ現場のギャップを埋める橋渡しとなるテーマを取り上げてこられました。これまでに著わされたご研究の一端を紹介すると、『中高齢者のフィットネス ― ラダーウォーキング ―』（創文企画, 2003 年）は、NHK 札幌

放送局制作のテレビ番組や北海道新聞等にも紹介され、中高齢者の健康づくりに関わる専門家から大きな反響を呼びました。また、昭和59年から昭和60年にかけて在外研修員として赴かれたアメリカ合衆国で、フィットネスの理論とその技術を研究され、その成果を『健康体力づくりのスポーツ科学』（同朋舎、1986年）にまとめられました。この研究成果をもとに、先生は当時、大学教育には未だ浸透していなかったフィットネス理論をいち早く取り入れ、その後の本学体育教育の発展・充実に向けてリーダーシップを発揮されました。

竹田先生は、本学において体育実技、体育講義、健康科学のほか、平成13年から平成16年まで認定心理士関連科目である「スポーツ心理」を担当されました。現在、認定心理士関連科目は経営学部を受け継がれていますが、「スポーツ心理」科目の開講は、大綱化以来の課題であった「共通教育と専門教育の一体となった学部教育」の方向性を示すものであり、そこに経営学部の目指す知識の融合の芽を見ることができました。思い出話になりますが、親睦会（蓬門会）の席上先生と隣り合わせになり、杯を酌み交わしながらストレッチの方法やスポーツクラブの現状など私の関心事を聞き受けていただき、いろいろと教えをいただきました。その中で、スポーツと経営がそれぞれいろいろな側面で相互に関わっていることを知り、思わぬ発見となりました。平成19年度及び平成20年度に「経営学部でスポーツ」をテーマに開催した市民公開講座は、まさしく一般教育と専門教育との融合の一つの試みであり、親睦会での談笑の成果でありました。そしてまた、先生からいただいた貴重なご指摘は経営学部の教育に反映され、新カリキュラムでの2部特別講義「スポーツと経営」に結実するところとなりました。

竹田先生は、学内においては昭和60年から6年間学生部長の要職を務められ、当時山積していた課題を処理され、大きな改革を実現されました。また、昭和48年の本学ご赴任以来、体育会陸上競技部の監督・部長を務められ、平成7年には、インカレ入賞選手を育てるなど、卓越した指導力を発揮されました。学外においては、北海道体育協会競技力常任委員、日本学生陸上競技連合参与、北海道社会保険健康づくり推進協議会会長の他、専門の学識経験に基づく社会活動等も活発にされており、読売新聞、スポーツニッポン、スポーツ報知、北海タイムスなどでコラム連載を担当するなど、道内陸上競技界の発展のみならず、札幌市民や北海道民に対する健康づくりに多大なる貢献を果たしてこられました。

そして、2008年12月22日（月）第1講時に迎えた最終授業。先生はいつもと変わらない様子で授業に臨まれていましたが、先生の一言ひとことが学生の心にしみ込むようで、これまで輩出した多くの学生たちに豊かな人間性を育まれてこられたことを、拝聴して実感いたしました。

一言で感謝の気持ちを言い表すことは到底できませんが、北海学園大学そして経営学部に賜りましたご貢献にたいして、教職員一同、あらためてお礼を申し上げます。ご退職後もお体をご自愛いただきまして、大学と学部の今後を暖かく見守り、お導きください。そして、いつまでもダンディなお姿をお見せください。

なお、本書の刊行にあたりましては、学外にあって、ゆかりの先生方にご寄稿をお願いいたしましたところご快諾を賜り、珠玉のご論文を収載することができました。これもひとえに竹田先生のお人柄によるものでありますが、ここに厚くお礼申し上げる次第です。ありがとうございました。最後に、本書の編集に際しては澤野雅彦教授、下村直樹准教授が論集委員としてその任にあたり、おかげさまで本日の刊行となりました。また、刊行にあたりましては田中昭憲教授、伊熊克己准教授をはじめ、多くの方々にご協力をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げ、竹田憲司教授退職記念号献呈のご挨拶の結びといたします。